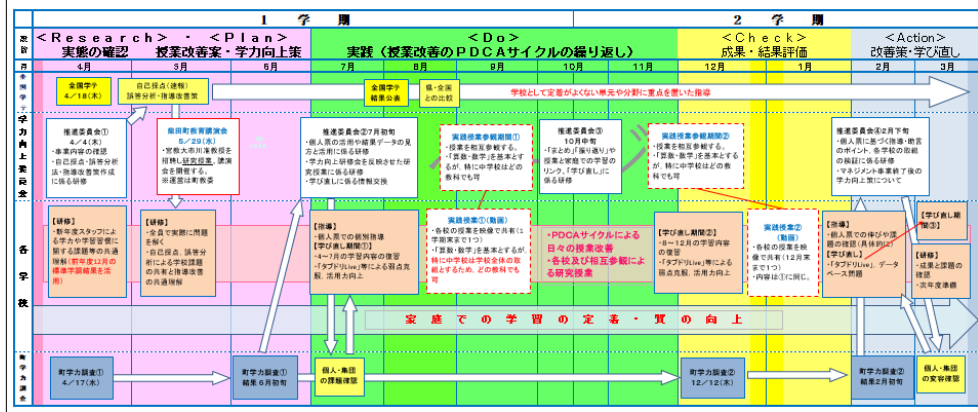


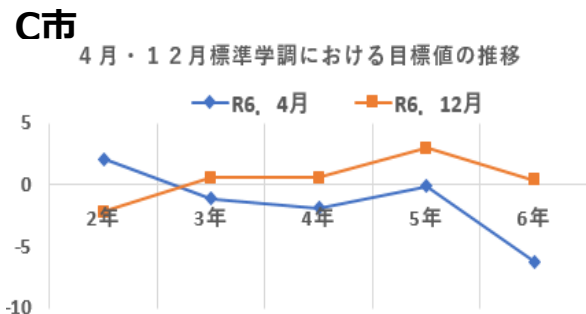
学力向上を推進する中核的な組織の設置

C市の学力向上のPDCAサイクル



○市町教育委員会担当者、学力向上MAによるコーディネーター

標準学調目標値の推移



推進委員会委員長の声

市町教育委員会担当者の声

○推進委員会は、学校の枠を超え、自治体全体をつなげ、学力向上に向けた学校間の連携を強化させた。そして、他校や異校種間における職員の研修の幅を広げていった。

<学力向上マネジメント支援事業> 標準学力調査（4月・12月）結果分析を踏まえた授業改善

学力向上のための年間スケジュールは、PDCAサイクルで学力調査時期を明確に位置付け、学級の達成率と個の変容を見取りながら調査結果を分析し、授業における具体的な手立てを立案して、実践に生かす

事例内容 標準学力調査結果の活用し、児童生徒一人一人に着目しながら、個別最適な学びにつなげる

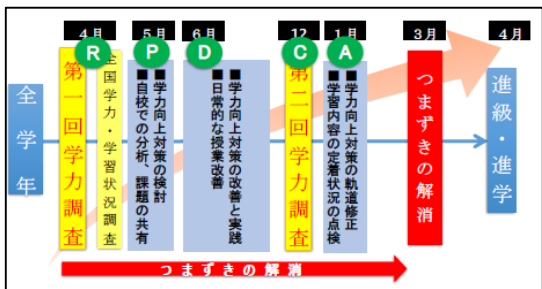
ワンランクアップシートの活用

学級分析表
～「ワンランクアップ大作戦」の進捗状況～

Hyper G-U進捗表		学級集団の型				
		調和型		多様な型		不安定型 熟達型
番号	年 組	A 平均値より 5%以上高い	B 平均値より 高い	C 平均値以下	D 平均値から 10%以下	E 平均値から 20%以下
1						
2						
3						
4						
5						
6						
7						
8						

- 担任が作成し、学級の状況を把握
- 一人一人の伸びや課題を確認し、授業や家庭学習で活用
- 授業改善の客観的な根拠や成果の確認資料としての位置付け

「学び直し」期間の設定

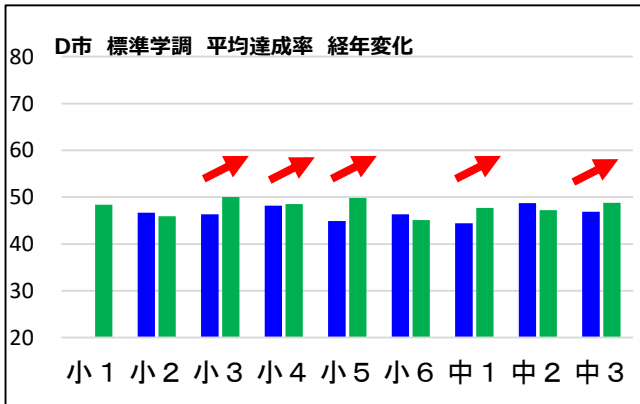


- カリキュラム・マネジメントを意識し、年間指導計画を工夫したつまづき解消期間を設定
- つまづき解消期間を「学び直し」として設定し、年度末だけでなく、学校の実態に応じた時期や内容を各校が検討し、全校での対応

取組の成果

達成率の向上

- 職員会議等で、共通の手立てを確認する時間を設定
- 達成感を味わわせたり、達成率が向上したりするための好事例を職員間で情報共有
- 短時間で本時の課題を押さえる導入
- 児童生徒のアウトプットの時間と学びの振り返りを保障する授業構成の工夫



授業改善

- 学習習慣の確立（話の聞き方・発表の仕方）
- 協働的な学び（ペア・グループでの学び合い）
- 板書の構造化とノートとの一体化
- 説明・指示・発問の精選
- 学びの環境（掲示物の文字の量と丁寧さ）
- 家庭学習との連携



市町村教育委員会の作成した年間計画をもとに、学校で実態に合わせたつまずきを解消する時間・期間を設定

事例内容 つまずきを解消する時間・期間を設定し、効果的に実践するための取組の工夫

1 年の取組を見通すための計画の作成と活用



- 年間計画は「児童生徒一人一人のつまずきを解消する。学び直し解消」というねらいのもと、自校化し、取組の見通しを持てるように作成
- つまずき解消期間を設定するには、日常の授業を計画的に行うことが重要
- つまずき解消は特定の学年、学級ではなく、全校で計画的な取組に

つまずき解消期間に扱う内容の精選

標準学力調査分析シート

2 各学年の学習の定着状況(第2回調査を受けての成果・課題)

1 年生	成果のみられた内容 自校達成率(全国乖離)	
	成果のみられた内容	

- つまずき解消期間に扱う内容は、児童生徒個々の標準学力調査等の分析結果をもとに精選
- 扱う内容によって個人やグループ、一斉等、学習形態を工夫することでより効果が期待

取組の成果

年間を見通した計画的な実施

- 年間計画を示すことで、年間の取組が明確になり、見通しをもって実践する学校が多くなった。
- 学力向上推進委員会に加え、教務主任者会でも提案することで、市町全体でつまずき解消期間を年間行事予定に明記することができた。そのことで、全職員で「学び直し」取り組む意識を高め、実践を自校化することができた。
- つまずき解消期間では、全校体制で取り組めるよう、担当が職員の割り振りを行った学校がある。そこでは担任外の職員を加えた複数職員で指導に当たることができ、個別指導や少人数指導が可能になった。

各校の実態に合わせた取組の工夫

- 児童生徒の実態から、つまずき解消期間を長期休業前に変更する学校もあった。
- つまずき解消期間に加え、学び直しとした復習の時間を朝活動や放課後等、週計画に位置付け、定期的に学び直しの機会を設けた。
- 生徒会が中心となり定期テストの前に勉強会を実施した。そこでは教師を含め、生徒同士で学び合う姿が見られた。
- 児童生徒の実態に合わせたプリント教材（基礎・基本や発展）を作成した。

<学力向上マネジメント支援事業> 学びの系統性・連続性を重視した小中連携の推進

「教職員」「児童生徒」「教育課程」「地域・保護者」の視点で連携・交流
「協働的な学び」による授業づくりを市全体で推進し、全ての子どもの学びを保障

事例内容 「協働的な学び」による授業づくりの推進 授業づくり研修会による小中の連続性を重視

教職員連携・交流

(中学校区の教員の同僚性の向上)

- 協働的な学び充実研修会（市主催、年3回）と合同授業研修会
- 指導主事学校訪問での授業参観、事後検討会への参加
- 他校MA訪問への教員の帯同
- 学びの連続性を意識した幼保小連携の充実



小中連携教育の取組

教職員連携・交流

教育課程連携・交流

- 【学びの連続性】
- 中学0年生プロジェクト
 - 小中協働の授業づくり

児童生徒連携・交流

【中一ギャップの解消】

- 合同あいさつ運動
- 子どもサミットの開催

地域・保護者連携・交流

- 【コミュニティスクールとしての学校】
- 地域を挙げてのデジタルメディアコントロールの実施

取組の成果

全ての子供の学びを保障する授業づくり

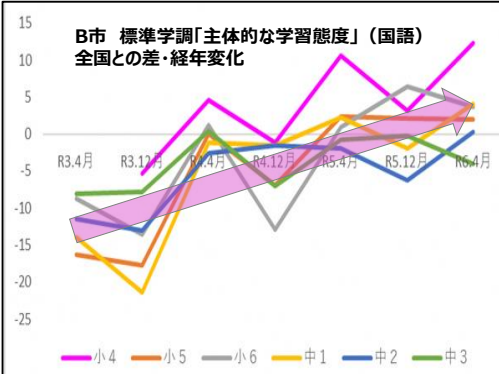
全市をあげて どの学校でも どの学級でも どの授業でも

ー支え合い 聴き合い 学び合うー

- 一斉ではなく、子供同士の学びへ
- グループでの学び合い
- 「分からない」をきっかけに考える
- 「丁寧に教える」から「子供同士の聴き合い 学び合いを丁寧に」への転換



標準学調「主体的な学習態度」の変容・達成率の向上



小中連携における 授業づくり

- 標準学力調査の「主体的な学習態度」の変容での上昇傾向
- 全国学力・学習状況調査での無解答率が低下
- 標準学力調査、達成率向上

<学力向上マネジメント支援事業> タブレットドリルを導入し、自律的・自発的な学習を促進

単元構想を意識した授業でのタブレットドリルの活用、家庭学習等での活用により、児童生徒の自律的・自発的な学習に展開

事例内容 タブレットドリルを授業、家庭学習等に効果的に導入し、児童生徒の「分かった」につなげる

授業中のタブレットドリルの活用



- タブレットドリルの活用を単元内に位置付け
- 授業前にレディネスを揃えるほか、授業後の発展学習にも活用
- 一人一人に合った適用問題を選択
- 「問題を出しっぱなし」からの脱却
適切な評価（賞賛等）は必要

放課後学習・家庭学習等でのタブレットドリルの活用



児童生徒の自律的・自発的な学習へ

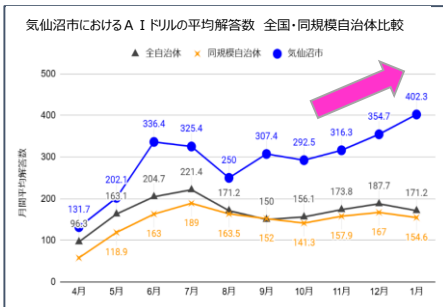
- 放課後学習や隙間時間での活用
- 家庭学習での活用
- 長期休業中の活用 等

授業との関連がポイント

取組の成果

タブレットドリルの活用で児童生徒の「分かった」へ

活用率・平均解答数の増加が知識・技能の確実な定着へ

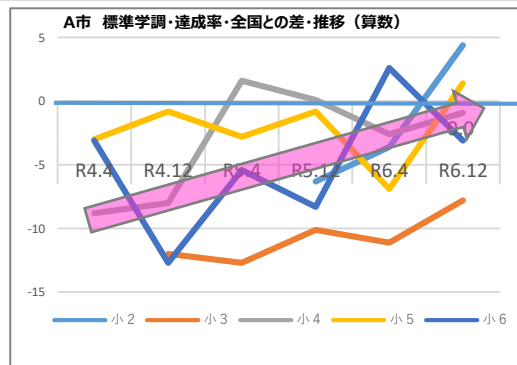


タブレットドリルの活用により
○標準学力調査の達成率の向上
学力が伸びる →
自律的・自発的な学習につながる

自律的・自発的な学習 →
学力が伸びる という可能性

学習の好循環へ

標準学調・達成率の変容



- タブレットドリルの活用
自律的・自発的な学習
- 学習者主体の授業づくり 等

標準学調・達成率・全国との差
【同一集団の推移・算数】

改善傾向
全国値を上回る学年も